

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00704

研究課題名（和文）京都の伝統工芸の制作プロセスに関するアーカイブ作成

研究課題名（英文）Research and making archives on the production process of traditional crafts in Kyoto

研究代表者

中野 仁人（Nakano, Yoshito）

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・教授

研究者番号：10243122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、伝統工芸工房の職人、行政、大学の産官学が連携し、伝統工芸の技術、造形および文化的価値を再検証し、それをわかりやすく視覚化したかたちで、社会に発信していくことが目的である。

まず伝統工芸技法を映像として撮影し、制作プロセスのわかりやすい解説とともに編集し、伝統工芸の展覧会等で一般の人に向けて上映した。名工の方々の制作現場を動画で記録することは非常に貴重なアーカイブとなる。次に工房での取材、調査、インタビュー、撮影を綿密におこない、それらを冊子体として編集した。さらに伝統工芸の技法を用いた新たな工芸品の企画と提案、デザイン試作、展覧会を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本の伝統工芸に関する研究は、職人、行政の連携を視野に入れることなく、工芸史、美術史の観点で伝統技法の継承について論じられ、工芸が生活に根ざして誕生し人々の暮らしの中で産業として発展して来たという側面からの検証が抜け落ちていた。今回は、伝統工芸工房での実際のものづくりに即して技法と図案との関連性について考察するとともに、素材と形態との関係、技法と機能性との連関について、工芸技法とデザインの実践を軸にしながら検証し、随時撮影を繰り返しながら記録を充実させた。多くが分業で行なわれるという伝統工芸の特質に着目し、工程の連携、商品化への道筋を俯瞰的に捉え、表現の展開について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project has been immersed in the study of traditional craft techniques in Kyoto, focusing on product development. During our work with several traditional craft workshops, we have investigated many aspects of the development of Kyoto's arts and crafts. We have looked into how traditional arts and crafts can be created in manner that takes into consideration the influence of modern society. We have studied how different forms of crafts can work harmoniously together, along with bringing together artisans from different backgrounds to work in collaboration. Furthermore, we have also investigated how new technology can play a role in its development.

研究分野：デザイン

キーワード：伝統工芸 デザイン 写真 映像

## 1. 研究開始当初の背景

2020年オリンピック開催を前に、日本文化や伝統工芸に関する多くのイベントが開催された。しかしそれを一過性のものにせず、伝統工芸の文化的理解を継続して、国民に促す必要がある。

ところで、これまでの日本の伝統工芸に関する研究は、職人、行政の連携を視野に入れることなく、工芸史あるいは美術史の観点や、伝統技法の継承について論じられて来た。それらはもちろん日本の工芸の価値を客観的に捉えるには意味のある方法であった。しかし、日本の工芸が単に鑑賞するだけの美術品として発展してきたのではなく、生活に根ざして誕生し、人々の暮らしの中で産業として発展して来たという側面からの検証が抜け落ちていたものがほとんどである。

そこで今回は、史論的・理論的な研究に終始するものではなく、伝統工芸工房での実際のものづくりに即して技法と図案との関連性について考察するとともに、素材と形態との関係、技法と機能性との連関について、これまで研究代表者が培ってきた伝統工芸技法とデザインの実践を軸にしながらか検証し、さらに随時撮影を繰り返しながら記録を充実させていく。そして、多くが分業で行なわれるという伝統工芸の特質に着目し、それぞれの工程の連携、商品化への道筋を俯瞰的に捉え、それによって生まれる表現の展開について明らかにする。こういったプロセスには、伝統工芸に対する評価軸を多視点的に想定する必要がある。そのためにも伝統産業を全体的に見渡す位置にある、京都府の染織工芸課との連携が非常に有意義である。もちろん府庁内には、文化、商業、観光等多くの部局が存在している。しかしそれらは縦割りの業務が基本で、横に連携した政策や活動が困難な状況にある。また、行政は伝統工芸に関する事業も単年度毎の枠組みで捉えることがほとんどで、担当者も継続して担当することが少ない。そこで、本研究者が中心となって、伝統工芸を核にして縦方向と横方向の連携を実現し、伝統工芸に関する効果的な情報の整理、アーカイブ化、およびその公表を目指していくものである。

こういった実践と理論を結びつける研究は海外でもその必要性が認識されつつあるが、まだ明確な形で結実した例がほとんど見られない。とくに伝統工芸の新たな展開への模索は日本が各国をリードする形で進んでいる。研究代表者はこれまでにイタリア、フランス、韓国、タイ、シンガポールなどの研究者およびデザイナーと意見交換を重ねてきたが、一様に彼らはその重要性に気づいている。本研究の成果を海外に発信することは、海外での日本の伝統工芸にますます関心が高まるとともに、伝統工芸の価値を再認識するフラッグシップとなるとともに、日本国内自体での伝統工芸に対する客観的評価を高めていくことに繋がると確信する。

研究代表者は現在すでに、複数の伝統工芸工房において調査、取材、インタビューを進めており、その一部を京都府染織工芸課の協力を得て、公開を始めている。また、いくつかの工房と連携してデザイン開発もおこなっているため、技術的実践的側面からの調査もスムーズに進められており、先に述べた多角的な視点が確保できる研究である。

## 2. 研究の目的

ここ数年の海外からの観光客増加によって、日本の伝統工芸もまた注目を浴び、売上を伸ばしていることは喜ばしいことである。しかし伝統工芸の本質ではなく、その装飾性、特異性に依拠する価値観が売上に大きく貢献していることは否定出来ず、それ故、一過性の賑わいであろうことは容易に推察出来る。本研究では、本来の日本人の生活に根ざした生きた伝統工芸の価値と魅力を再認識するために職人および行政と連携しながら、材質、製法、デザイン、装飾の調査分析を進め、アーカイブ化を計る。さらに作り手、使い手の意識調査を進め、現代から未来に向けての伝統工芸のあり方を精査し、新しい工芸品のデザインに繋げる一助とするとともに、それを広く公開することにより、広く日本国民および海外に伝統工芸の真の価値を発信していく。

## 3. 研究の方法

本研究は伝統工芸工房・職人、行政（京都府）、大学（本申請者）の産官学が連携し、伝統工芸の技術、造形および文化的価値を再検証し、それをわかりやすく視覚化したかたちで、社会に

発信していくものである。そのために大きく3つの方向性を設定した。

一つ目は、伝統工芸技法を映像として撮影し、制作プロセスのわかりやすい解説とともに編集し、伝統工芸の展覧会等で一般の人に向けて上映する。名工の方々の制作現場を動画で記録することは非常に貴重なアーカイブとなる。

二つ目は、工房での取材、調査、インタビュー、撮影を綿密におこない、それらを冊子体として編集する。

三つ目は、伝統工芸の技法を用いた新たな工芸品の企画と提案、デザイン試作、および展覧会を開催する。

これらの研究を進めるにあたり、京都府と密に連携を計った。府は、各分野の組合と協力しながら各種の活動を進めているが、それぞれの工芸技法のプロセスと工芸品の展開、そして職人の姿勢や生き方を調査し、そこに息づく人間性までも含んだ工芸の魅力を発信することにまでは至っていない。そこで本研究は、工芸技術ごとのプロセス、歴史的変遷、工芸品の特徴について綿密に聞き取りおよび文献調査を進め、その後、職人の方たちと打ち合わせをかさねたのちに、写真撮影、映像収録を進め、記録、分析、保存、発信をおこなった。職人の生の声を理解し、また今後の工芸技法の存続に向けての考えなど、現代の社会的問題点と照らし合わせて考察した。

一方で、工芸品の受け手すなわち使用者、あるいは造詣の深い方への取材を続け、日本文化における伝統工芸品の価値を再検証した。それを伝統工芸従事者にフィードバックすることにより、新たな伝統工芸のデザイン開発の資料となることが期待される。さらにこれらをネットや出版を通じて、一般に公開することにより、日本国民の伝統工芸に対する意識改革を目指した。

#### 4. 研究成果

本研究で、さまざまな伝統工芸の実情や課題が浮き彫りになった。現在まで残って来た伝統工芸には、高度な技術と合理性、経済性がこれまでは備わっていたともいえる。しかし今、その均衡が崩れかけており、社会の状況と人々の意識との距離が生まれつつある。また、一過性の日本の伝統ブームの中では、本物ではなく見かけだけの伝統的なものが氾濫し、それを本物と受け止めてしまう人々の増加が問題となっている。今、まずは日本人自身の伝統工芸に対する意識改革が重要課題であり、同時にその価値を正当に海外に発信することが求められている。

今回、当初の計画通り、以下を実践し、大きな成果を得た。

##### 1 記録映像の撮影、編集、公開

京都府商工労働観光部染織工芸課及び伝統工芸士匠会主催の『京の名工展』（京都文化博物館等で開催）の広報ディレクションを担当し、記録した伝統工芸技法の映像の上映も会場内でおこなった。期間中、毎年担当し、今後も継続予定。

##### 2 技法の調査、職人への取材、工芸の撮影、編集、出版

京都の伝統工芸技法を繊維、金属、陶磁器、人形、木工漆工に分類し、約40件の工房を取材した。そのうちの25件についてとりまとめ、写真集兼報告書という形で編集し『京の工芸ものがたり』（理論社）『工芸バイリンガルガイド』（小学館）など出版した。

##### 3 技法の実践、開発、提案、展示

技法の理解と分析を行ったのちに、新たな商品展開の模索、商品開発とその提案、また新技術利用の実験などをおこなった。その成果発表として、期間中毎年『伝統の虫』と題して新しい伝統工芸を提案する展覧会を開催した。またその経過や結果について論文にまとめデザイン学会作品集で発表した。

なお、本研究に終わりではなく、現在も京都府および伝統工芸士の方たちと連携し、取材、撮影、分析、提案を継続している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中野仁人	4. 巻 24巻
2. 論文標題 伝統工芸とデザイン教育－知る、作る、伝える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 デザイン学研究作品集	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中野仁人、澤田美恵子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国際協力機構	5. 総ページ数 230
3. 書名 Beauty Through the Seasons	

1. 著者名 中野仁人、澤田美恵子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 小学館	5. 総ページ数 110
3. 書名 工芸バイリンガルガイド	

1. 著者名 中野仁人、澤田美恵子、ブライアン・チェン	4. 発行年 2019年
2. 出版社 理論社	5. 総ページ数 208
3. 書名 京の工芸ものがたり2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----